

2016年度博士論文（要旨）

中年期の人が望む老後像に関する研究
—質的研究と量的研究を用いて—

桜美林大学大学院

松永 博子

目次

1. 緒言	1
1) 本研究の目的と背景	1
2) 先行研究の到達点と解明すべき課題	2
3) 本研究で解明すること	2
2. 研究1 中年期の人の望む老後像の解明	3
1) 目的	3
2) 方法	3
3) 結果	3
3. 研究2 中年期の人の望む老後像に関する質問項目の作成と望む老後像	4
1) 目的	4
2) 方法	4
3) 結果	5
4. 研究3 中年期の人の望む老後像に関連する要因の解明	6
1) 目的	6
2) 方法	6
3) 結果	7
5. 総合的考察	8
6. 本研究の限界	9
引用文献	i

1. 緒言

1) 本研究の目的と背景

我が国の人々の寿命は急速に延び、2015年の平均寿命は男性80.79歳、女性87.05歳となった（厚生労働省 HP Dec. 02, 2016）。その数値は、現在中年期にある人々にとっては、自身が子供の頃想定していたよりも長い高齢期を過ごす事を示している。ところが、日本の現状を見ると、バブル景気以降それまでの終身雇用制度は崩壊し（NIRA HP Dec. 25, 2016）、介護保険制度の施行、後期高齢者医療制度の開始、漸次的な老齢年金支給開始年齢の引き上げ（厚生労働省 HP Mar. 14, 2016）など、これまでの中年期から高齢期への制度的な枠組みは大きく変更され、この先も不確かな状態である。

このような状況の中で、高齢期にどのような生活を送るのかを考える事の重要性は増してきていると思われる。そこで、本研究ではその最初の取り組みとして、人生の折り返し地点に当たる中年期の人々が望む老後像について、あるか否か、さらにその関連要因も含め明らかにする。

この研究には、2通りの意義がある。第1に、高齢期以前に望む老後像を考える事で、その時点における生活満足度だけでなく、幸せな高齢期を迎えられる可能性がある。小田（2003）は、50代前半までに高齢期の準備を考え、60代前半までに準備を始めた人は高齢期の生活満足度や幸福感が高い事を示し、鈴木ら（1997）は、人生設計済みの方が現在の満足度が高い事を示した。本研究の課題である望む老後像については、人生設計や老後準備を考える事と密接に関連している事から、高齢期だけでなく、それ以前の生活満足度に貢献する可能性がある。

第2に、高齢期を意識しない人がそのまま高齢期を迎える事への対応策を考える事ができる。第2に関連して、これまでの研究から、望む老後像の実現には社会経済的格差がある事が予想される。杉澤（2015）は、高齢期に多様なモデルを設定し、その中から自分の目標を選択し、その目標の達成に向かって活動できるかどうかには社会経済的な格差が関連していると指摘した。この格差を、望む老後像を考える事によって中年期において自覚できるとすれば、老後生活の基盤となるお金の用意や生活習慣病の予防などの老後準備への契機となり、高齢期に想定される格差を縮小させる事に貢献する可能性がある。

これまでの議論では、中年期を明確に定義してこなかった。そこで本研究では、厚生労働省の健康日本21（厚生労働省 HP Jan. 06, 2016）で用いられた、「中年期」45歳から64歳という区分を参考にして、高齢期について想定できるほどには歳を取り、けれども高齢期への準備にはまだ余裕があると感じられるだろうという意味から、45歳から55歳を中年期と定義する。

望む老後像についてもここに定義する。望む老後像とは、個人の望む自己の老後像である。類似する語彙だが、高齢者観は、自己ではなく、一般的な高齢者の見方もしくはは

一般的な高齢者のイメージとする。

2) 先行研究の到達点と解明すべき課題

(1) 中年期の人の望む老後像

中年期の人の望む老後像とはどのようなものかという事を検討していた先行研究は以下の5件であった。古谷野ら(1985)は、「家族主義と個人の独立」「隠居と参加」の2つの軸から成り立つとし、児玉(1991)は、「同居と別居」「同調と自己主張」という2軸を見だし、児玉ら(1995)は、「安定志向と変化志向」「同調志向と自己主張」という2つの軸で示せるとした。小手川ら(2005)は、自立・心身ともに健康に豊かな老後を送りたいという事を示し、中原・藤田(2007)は、挑戦と活動的な生き方であるとした。

以上を集約すると、古谷野ら(1985)の「隠居と参加」、児玉ら(1995)の「安定志向と変化志向」は、共通する構成概念であり、Activity Theory(活動理論)やDisengagement Theory(離脱理論)といったSuccessful Agingの理論モデルに対応していると判断でき(Havighurst1961)、中原・藤田(2007)に関してはContinuity Theory(継続性理論)に相応すると位置づけられる(Atchley1989)。さらに、古谷野ら(1985)の「家族主義と個人の独立」や児玉(1991)、児玉ら(1995)の「同調志向と自己主張」は共通する構成概念であり、従来のSuccessful Agingの理論モデルとは異なる軸として取り上げられている。

(2) 中年期の人の望む老後像の関連要因

中年期の人の望む老後像の先行研究の内、関連要因について記述のある先行研究は3件であった。古谷野ら(1985)は、「家族主義と個人の独立」には学歴と年齢が影響する事を明らかにし、「隠居と参加」では、男性の方が「参加」傾向を持つ事を示した。児玉ら(1995)は、「同調志向と自己主張」に年齢と学歴の関連を見だし、中原・藤田(2007)は、年齢が高いほど同調志向が増す事と、女性の方が安定・防衛志向を望む傾向を明らかにした。

以上を集約すれば、中年期の人の望む老後像の関連要因として、「変化志向と安定志向(参加と隠居)」には性、「同調志向と自己主張(家族主義と個人の独立)」には年齢・学歴が明らかにされている。

3) 本研究で解明すること

以上の先行研究の限界を総括して、中年期の人の望む老後像に関して以下の3点の研究を設定した。

研究1では、中年期の人の望む老後像について自由に語ってもらった内容を質的に分析する事によって、中年期の人の望む老後像とはどのようなものかを明らかにする。

研究2では、研究1に基づき、「中年期の人の望む老後像に関する質問項目」を作成

し、その信頼性・妥当性を検証する。その上で、望む老後像の様相を示す。

研究3では、研究2で作成した「中年期の人の望む老後像に関する質問項目」を用いて望む老後像に関連する要因を量的研究によって明らかにする。

2. 研究1 中年期の人の望む老後像の解明

1) 目的

研究1の目的は、中年期の人の望む老後像について自由に語ってもらった内容を質的に分析する事によって、中年期の人の望む老後像を明らかにする事である。

2) 方法

(1) 調査の対象

調査の対象は、45歳から55歳にある男女を条件として、機縁法によって協力の得られた17名（男性8名、女性9名）を分析の対象とした。

(2) 調査期間

調査期間は、2012年10月から2013年1月であった。

(3) データ収集方法

調査対象者に半構造化によるインタビュー調査を行い、その内容をICレコーダーに録音した（15分から30分程度）。

(4) 調査内容

「あなたにとって望む老後像とはどのようなものですか。」と質問し、望む老後像について自由に語ってもらい、「なぜそのように考えたのですか」と尋ねた。インタビューの際、「わからない」「考えていない」という回答であった場合、「こうであったらいいなというような老後はありますか。」と尋ね、少し考えてもらい、発言を促した。それでも「わからない」もしくは「思い浮かばない」という回答し、発言がない場合は、インタビューを終了した。

(5) 分析方法

分析方法にはKJ法を用いた。KJ法を使用するにあたっては、KJ法正規認定コンサルタント、エバーフィールドにおいて3日間の研修を行い、KJ法の正規分析方法の習得後、その方式に則って分析を行った。

(6) 倫理的配慮

桜美林大学研究倫理委員会の承認を得て行った。

3) 結果（紙面の都合上、全体の結果と叙述化のみを表示する）

男性全体と女性全体に示した表札と、統合されなかった元ラベルを30枚の元ラベルとして用い、統合を行った。

【望む老後像を持つ】《望む老後像はない》〈高齢者観〉〈生と死に対する信念〉という

4 つの表札で統合された。【望む老後像を持つ】と《望む老後像は持たない》は〈高齢者像〉と〈生と死に対する信念〉からの影響を受けていた。【望む老後像を持つ】の下位にある《挑戦と活動》は[自立（家族に迷惑をかけない）]に支えられていた。

・ 叙述化

中年期の人には、望む老後像を持つ人と持たない人が存在した。望む老後像を持つ人は、家族に迷惑をかけないで、家族と共にある自立した老後像を望んでおり、それが可能であれば目標や生きがいを持って生きたいと考えている。望む老後像を持たない人は、敢えて望む老後像を持たないという人と長生きしたくないという人がいる。いずれの人にも、生きる事や死に対する信念、憧れの高齢者やなりたくない高齢者のイメージを持っていた。

3. 研究 2 中年期の人の望む老後像に関する質問項目の作成と望む老後像

1) 目的

研究 2 の目的の第 1 は、研究 1 で示された「挑戦と活動」「自立（家族に迷惑をかけない）」「望む老後像は持たない」という 3 つの構成概念に加え、「望む老後像は持たない」の下位概念に、研究 1 で多く発言された「考えていない・わからない」を含んだ望む老後像に関する質問項目を作成し、質問項目の構成概念妥当性と信頼性を検証する。第 2 に、「挑戦と活動」は「自立（家族に迷惑をかけない）」に支えられていた。そのようなヒエラルヒーが存在するかどうかを検討する。第 3 に、望む老後像の尺度の分散を確認し、中年期の人の望む老後像を明らかにする。

2) 方法

(1) 調査の対象と調査方法

東京都日野市在住の 45 歳から 55 歳（年齢は転記日である 2013 年 9 月 26 日付）800 人を、選挙人名簿から系統抽出し、郵送法による自記式調査を実施した。回収された調査票は、128 票であったが、そのうちの 4 票は白紙回答の為、124 票を分析の対象とした。

(2) 調査期間

調査は 2013 年 12 月初旬から 12 月末に実施した。

(3) 分析方法

質問項目作成には、KJ 法を用いた。IBM SPSS 統計解析ソフト 23 と Amos23 を用いて、質問項目の信頼性と構成概念妥当性の検討と分散の確認を行い、ヒエラルヒーの検討には、グリーンの手法を用いたスケーログラム分析を行った。

(4) 倫理的配慮

質問紙の表紙に、倫理的配慮について明記した。それらにより、回答をもって同意を

得たものとした。本研究は、桜美林大学研究倫理委員会の承認を得て実施した。

3) 結果

(1) 質問項目作成

研究1で分析に用いた104の元ラベルと研究1では分析に加えなかった「考えてない・わからない」という10の元ラベルから、KJ法を用いて集約を行い、見いだされた表札から以下の13項目を作成した。

「挑戦と活動」の項目を、「新しいことを始めたい」「いろいろなことをやってみたい」「変化のある暮らしをしたい」「人間関係を広げたい」「社会の為に尽くしたい」という5項目、「自立（家族に迷惑をかけない）」の項目を、「なりたくない高齢者にならないよう努力していきたい」「自分の事は自分でするようにしていきたい」「家族や親戚に迷惑をかけないようにしていきたい」「わがままな高齢者にならないようにしたい」「健康でいるように努力していきたい」の5項目、「望む老後像は持たない」の項目を、「長生きしたくない」「老後は特に考えていない」「なすがまま、敢えて努力はしない」の3項目とした。その内、児玉ら(1995)の質問項目と同じものは、「挑戦と活動」の5項目であった。回答選択肢は、「まったくそう思う」に5点、「少しそう思う」に4点、「どちらともいえない」に3点、「あまりそう思わない」に2点、「全然そう思わない」に1点を与えた。

(2) 信頼性と妥当性の検討

先の13項目を用いて共分散構造分析を行い、構成概念妥当性を試みた。共分散構造分析のモデルは成立したが、「社会の為に尽くしたい」.29と「健康でいるよう努力していきたい」.33はパス係数が低いため、項目から削除し、再度、11項目で共分散構造分析を行い、CFI=.986、RMSEA=.027というモデル適合を確認した。それにより、望む老後像に関する3つの因子の構成概念妥当性が検証されたが、見いだされた3つの因子は、その内容から望む老後像の下位概念ではなく、3つの概念であると考え、再度、探索的因子分析を行った。「挑戦と活動」に相応する4項目について因子分析を行い、1つの因子で構成されているのを確認した。Cronbachの α 係数は.788であり、信頼性を確認した。尺度名については研究1と同様に「挑戦と活動」とした。「自立（家族に迷惑をかけない）」に相応する4項目について、因子分析を行い、1つの因子で構成されているのを確認した。Cronbachの α 係数は.673であり、信頼性を確認した。尺度名については研究1で見いだされた「自立（家族に迷惑をかけない）」と意味内容は一致しているが、よりわかりやすい表現として、因子名を「迷惑をかけたくない」とした。「望む老後像は持たない」に関する質問項目の3項目について因子分析を行い、1つの因子である事を確認した。Cronbachの α 係数は.611であり、若干低い信頼性を確認した。尺度名については「望む老後像は持たない」と同義だが、老後の「放棄志向」である事から、「放棄」とした。これらにより、3つの尺度が作成された。

(3) 望む老後像に存在するヒエラルヒーの検討

「挑戦と活動」「迷惑をかけたくない」の質問項目の回答の「まったくそう思う」「少しそう思う」を「1」、それ以外を「0」の値に変換し、「1」の値の少ない順にスケオグラム表と一覧表、エラー表を作成した。回答数の少ない順に項目と回答率を示す。「変化のある暮らしをしたい」65 (52.8%)、「人間関係を広げたい」72 (58.5%)、「新しいことを始めたい」93 (75.6%)、「いろいろなことをやってみたい」100 (81.3%)、「わがままな高齢者にならないようにしていきたい」111 (90.2%)、「なりたくない高齢者にならないようにしていきたい」112 (91.1%)、「家族や親戚に迷惑をかけないようにしていきたい」114 (92.7%)、「自分の事は自分でするようにしていきたい」119 (96.7%)であった。エラー数の合計は51であり、ガットマンの再現性係数は94.81%であった。つまり、これら8項目は、再現性係数90%以上で、20%以下・80%以上の回答カテゴリーばかりではなく、エラーよりノンエラーが多くエラーが無作為に散らばっているといった点から、ガットマン尺度の様相を呈していると判断できる。項目は通過率の低い順に「挑戦と活動」の項目「迷惑をかけたくない」の項目となっていた。

(4) 各尺度の平均値と分散

3つの尺度の平均値と標準偏差を以下に記す。「挑戦と活動」の平均値は15.27で標準偏差は3.051、「迷惑をかけたくない」の平均値は18.28で標準偏差は1.844、「放棄」の平均値は7.41で標準偏差は2.456であった。「迷惑をかけたくない」尺度は天井効果を示していた。

4. 研究3 中年期の人の望む老後像に関連する要因の解明

1) 目的

研究2で作成した「望む老後像に関する3つの尺度」すなわち「挑戦と活動」「迷惑をかけたくない」「放棄」を用いて、中年期の人の望む老後像の関連要因を示す。

先行研究では、中年期の人の望む老後像の関連要因として、「変化志向と安定志向」には「性」、「同調志向と自己主張（家族主義と個人の独立）」には「年齢」「学歴」が明らかにされているが、研究1では「同調志向と自己主張（家族主義と個人の独立）」は、「自立（家族に迷惑をかけない）」という望む老後像の下位概念に共存するものであり、軸の様相を呈していなかった。そこで、「変化志向と安定志向」との関連が示された「性」が第1の関連要因であると想定される。それ以外の関連要因として、第2、第3に、「主観的健康状況」「主観的経済状況」を挙げる。杉澤（2015）は、望む老後像の実現に内在する社会経済的な格差を指摘しており、中年期にあるからこそ、明確に望む老後像を持ち主体的に取り組むには、生活の根幹をなす健康と収入が基盤となると想定される。高齢期の生活満足度と「主観的健康状況」「主観的経済状況」の関連は、すでに明らかにされている(Lonard 2008、 Britton & Shipley 2008、 古谷野・安藤 2008)。第4に「高

「高齢者観」は、研究 1 において望む老後像に影響する事が明らかにされており、Successful Aging(主観的幸福感)や Positive Ageing の関連要因としても関連が示されている(原田ら 2008、Chong et al. 2006、Calasanti 2015、Jopp et al. 2015、Gracium et al. 2015、Jopp et al. 2016)。第 5 には、「自尊感情」を挙げる。Kornadt & Rothermund(2012)は、現在の自己評価と将来の自己評価が関連しているとしており、若本(2010)も、中年期の人で老いへの自覚が高い人ほど自尊感情が低く、老いへの対処を放棄する傾向を見いだしていた。つまり、「放棄」の人ほど自尊感情が低い可能性がある。

2) 方法

(1) 調査の対象と調査方法、調査期間

研究 2 と同じ

(2) 分析方法

IBM SPSS 統計解析ソフト 23 を用い、相関分析と重回帰分析を行った。従属変数は、研究 2 で作成した、「挑戦と活動」「迷惑をかけたくない」「放棄」の尺度を用いた。独立変数には、性別、主観的健康状況、主観的経済状況に割り当てられた値を変数とした。高齢者観には、原田ら(2005)による日本語版 Fraboni エイジズム尺度短縮版(以下、FSA と表記)を用い、自尊感情には、Rosenberg の自尊感情尺度(以下、自尊感情と表記)を用いた(日本語訳は桜井(2000))。

(3) 倫理的配慮

研究 2 と同じ。

3) 結果

(1) 属性

基本属性について報告する。男性 71 人(57.3%)、女性 52 人(41.9%)、欠損値 1 人(0.8%)、合計 124 人であった。主観的健康状況については、良い 28 人(22.6%)、まあ良い 37 人(29.8%)、普通 36 人(29.0%)、あまり良くない 21 人(16.9%)、良くない 1 人(0.8%)であり、主観的経済状況については、まったくゆとりがない 16 人(12.9%)、あまりゆとりがない 31 人(25.0%)、標準的である 47 人(37.9%)、ややゆとりがある 21 人(16.9%)、ゆとりがある 8 人(6.5%)であった。

(2) 相関分析結果 (** $p < 0.01$ 、* $p < 0.05$)

「挑戦と活動」と「迷惑をかけたくない」には、有意な相関は見いだせなかった。「放棄」については、「FSA」.265**、「自尊感情」-.312**、「性別」.206*の相関が見いだされた。

(3) 重回帰分析結果

「挑戦と活動」と「迷惑をかけたくない」には、有意なモデルは成立しなかった。

「放棄」の重回帰モデルの決定係数は.192、 f 検定は 1%水準で有意であり、 t 値が

有意な独立変数は、「自尊感情」「FSA」が 1%水準で有意、「性」が 5%水準で有意であった。

5. 総合的考察

1) 本研究で解明した課題

研究 1 では、中年期の人々の望む老後像について自由に語ってもらった内容を質的に分析し、「望む老後像を持つ」と「望む老後像は持たない」という構成概念を見だし、「望む老後像を持つ」の下位概念として「挑戦と活動」「自立（家族に迷惑をかけない）」を明らかにした。さらに、その 2 つの下位概念にある望む老後像のヒエラルヒーを示した。望む老後像に影響する構成概念には、「高齢者観」と「生と死への信念」を見いだした。

研究 2 では、研究 1 で自由に語ってもらった内容を基に「中年期の人々の望む老後像に関する 3 つの尺度」を作成し、その尺度を用いて、「挑戦と活動」「迷惑をかけたくない」「放棄」を測る事を可能とした。それにより、研究 1 で示された「挑戦と活動」「迷惑をかけたくない」に存在する望む老後像のヒエラルヒーを明らかにし、「迷惑をかけたくない」は、ほとんどの人の望む老後像である事を示した。

さらに研究 3 では、望む老後像の関連要因を明らかにしようと試み、「放棄」は、女性が多く、否定的な高齢者観を持ち、自尊感情が低いという特徴を明らかとした。

2) 中年期における老後像研究の新しい展開の可能性

今後に残された課題の第 1 として、本研究で明らかにした望む老後像と実際の老後は同じではない可能性が大きい。理想的には、縦断研究によって中年期から高齢期までの老後像がどう変化していくのか、結果としてどのような老後が実現されたのかを追う事が望ましい。

今後に残された課題の第 2 として、本研究では 45 歳から 55 歳というコホートを対象としたが、他のコホートはどのような老後像を描いているのか、また、その関連要因は何かといった点は明らかには出来なかった。他のコホートについても検討し、その関連要因を明らかにすべきである。

今後に残された課題の第 3 として、社会経済状況の違いが、中年期の人々の望む老後像にどのように影響していくのかを追究すべきである。

今後に残された課題の第 4 として、色々な介入を試みて、その効果を研究する事を提案したい。効果としては、次のような事が考えられる。一つには、望む老後像を持つ事は個人に有益となる可能性を持つ。さらに、この事は社会的な効果を持つかもしれない。将来を考える余裕のない人々が、中年期の内に望む老後像を持つように改善でき、老後準備に取り組み、より良い老後の実現が出来たとすれば、それは社会的な格差を是正できたという事になる。そのためにも、今後に残された課題の第 1、第 2、第 3 を踏まえ

た上で、どのような介入内容がどの年齢層に効果的であるかを研究していく必要もある。

3) 老年学におけるライフコースの視点の導入

老年学分野の研究には、高齢者に関する研究や高齢者を看護・介護する専門職の研究が多く、中年期に対しての研究の蓄積は緒言でも示したように不十分である。Jung (1979) は、多くの人が将来の生活とその必要事項についての予備知識などの「心の準備」をしないで人生後半を歩き出す事に対して、40代を過ぎた人たちのための高等教育の必要性を指摘した。Jung (1979) の指摘した、人生後半のための「心の準備」こそ老年学の果たすべき役割である。

6. 本研究の限界

研究1の限界に、婚姻状況や子の有無などできるだけ多様な事例サンプリングを行ったが、十分な理論的サンプリングにまでには至らなかったという点を挙げる。

研究2の限界の第1に、郵送法による問題点について言及する。自記式質問紙、郵送法の場合、宛名本人が記入したかがわからないという点を挙げる。次に、記入の上、返信してもらうため、調査対象者の意思が必要である。それらを踏まえると、本調査の回答者の傾向には、自己の将来について関心がある人に偏った恐れがある。第2に、回収した有効回答が124票である事を挙げる。第3に、標本の男女比率が母集団と異なる事を挙げる。

研究3の限界に、研究2の限界に加え、第1に、研究3で関連要因として位置づけた変数の分散が小さく、これら関連要因の効果が有意でなかった可能性がある。第2に、分析モデルの再検討も必要と思われる。「挑戦と活動」については、中年期の社会活動性や活動への志向性を位置づける必要があり、「迷惑をかけたくない」については、私的扶養への期待や規範も要因として加える必要がある。これらの関連要因の効果については、今後に残された課題とする。

引用文献

- Atchley R. C. : A Continuity Theory of Normal Aging. *The gerontologist*, 29 (2) :183-190(1989).
- Britton A., Shipley M., Singh-Manoux A., et al. : Successful Aging ; The Contribution of Early-life and Midlife Risk Factors. *Journal of the American Geriatrics Society*, 56 (6), 1098-1105 (2008).
- Calasanti T. : Combating Ageism: How Successful is Successful Aging *The Gerontologist* (Advance Access publication), 1-9 (2015).
- Chong A. M., Ng S., Woo J., et al. : Positive Ageing; the views of middle-aged and older adults in Hong Kong. *Ageing & Society*, 26, 243-265 (2006).
- Craciun C., Gellert P., Flick U. : Aging Precarious Times; Positive Views on Aging in Middle-Aged Germans with Secure and Insecure Pension Plans. *Ageing International*, 40, 201-218 (2015).
- Dabis H., Yates J. : Successful navigation of the stormy seas; What factors lead to a successful transition from the quarterlife crisis? *The Coaching Psychologist*, 10 (1), 17-24 (2014).
- 原田謙, 杉澤秀博, 杉原陽子ほか: 日本語版 Fraboni エイジズム尺度 (FSA) 短縮版の作成 ; 都市部の若年男性におけるエイジズムの測定, *老年社会科学*, 26 (3) , 308-319 (2005) .
- 原田謙, 杉澤秀博, 柴田博: 都市部の若年男性におけるエイジズムに関連する要因. *老年社会科学*, 29 (4), 485-492 (2008).
- Havighurst R. J. : Successful Aging. *The Gerontologist*, 1 (1), 8-13 (1961).
- 日野市 HP Aug. 05, 2013、Oct. 01, 2013 アクセス
<http://www.city.hino.lg.jp/index.cfm/196,17582,347,1996.html>
- Jang S., Choi Y., Kim D. : Association of Socioeconomic Status with Successful Ageing; Differences in The Components of Successful Ageing. *Journal of Biosocial Science*, 41, 207-219 (2009).
- Jopp D. S., Wozniak D., Damarin A. K., et al. : How Could Lay Perspectives on Successful Aging Complement Scientific Theory? ; Findings From a U. S. and a German Life-Span Sample. *The Gerontologist*, 55 (1), 91-106 (2015).
- Jopp D. S., Jung S., Damarin A. K., et al. : Who Is Your Successful Aging Role Model? *Journals of Gerontology: Social Sciences*, Advance Access publication, 1-11 (2016).
- Jung C. G. (鎌田輝夫訳) : 人生の転換期. *現代思想*, 4, 42-55 (1979) .
- 川喜多二郎 : KJ 法入門コーステキスト. 非売品, 20, KJ 法本部・川喜多研究所, 東京 (1997).

- 児玉好信, 古谷野亘, 岡村清子ほか:都市壮年における望ましい老後の生活像. 老年社会科学, 17(1), 66-73(1995).
- 児玉好信:都市の老勤労者後に対する態度構造に関する研究. 共立女子短期大学生生活科学学科紀要, 34, 37-42(1991).
- 国立安全保障人口問題研究所 HP Aug. 05, 2013 アクセス
http://www.ipss.go.jp/syoushika/tohkei/Popular/P_Detail2014.asp?fname=T02-03.htm
- 小松光代, 岡山寧子, 福間和美ほか:中高年の考える老後の生活. 京都府立医科大学医療技術短期大学紀要, 10, 75-84 (2000).
- Kornadt A. E. & Rothermund K.: Internalization of Age Stereotypes Into the Self-Concept via Future Self-Views: A General Model and Domain-Specific Differences. *Psychology and Aging*, 27(1), 164-172(2012).
- 小手川良江, 上村朋子, 本田多美枝:M市在住の中高年の生活実態とサクセスフル・エイジング, 日本赤十字九州国際看護大学 intramural research report, 3, 56-67(2005).
- 厚生労働省 HP Jan. 06, 2016 アクセス <http://www.kenkounippon21.gr.jp/>
- 厚生労働省 HP より PDF をダウンロード Mar. 14, 2016 アクセス
<http://www.e-healthnet.mhlw.go.jp/information/dictionary/heart/yk-081.html>
- 厚生労働省 HP より PDF をダウンロード Dec02, 2016 アクセス
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/life/life15/dl/life15-14.pdf>
- 古谷野亘, 井上勝也, 岡本多喜子ほか:都市壮年における老後の生活像と準備行動(1); 老後の生活像. 老年社会科学, 7, 97-108(1985).
- 古谷野亘, 長田久雄:実証研究の手引き;調査と実験の進め方・まとめ方. 第1版, ワールドプランニング, 東京(1992).
- 古谷野亘, 安藤孝敏:改訂・新社会老年学; シニアライフのゆくえ. 第2版, ワールドプランニング, 東京(2008).
- 黒田文:サクセスフル・エイジングに関する再考; プロセス指向性を求めて. 社会文化論集. 6, 53-64(2010).
- Lachman M. E.: Handbook of Midlife Development. John Wiley & Sons. Inc. New York, 493-498(2001).
- Leonard W. M.: Successful Aging; An Elaboration of Social and Psychological Factors. *The International Journal of Aging and Human Development*, 14(3), 223-232(1982).
- Lewis J. P.: The Importance of Optimism in Maintaining Healthy Aging in Rural Alaska. *Qualitative Health Research*, 23(11), 1521-1527(2013).
- Maslow A. H.:人間性の心理学. 第10版, 産業能率短期大学出版部, 東京(1971).
- 村山くみ, 嘉村藍, 大月和彦ほか:中高年者の生活状況と主観的健康観の関連について.

松本短期大学紀要, 57, 57-67 (2008).

- 内閣府: 高齢期に向けた「備え」に関する意識調査. 内閣府政策統括官 (2014).
- 内閣府 HP Aug. 11, 2016 アクセス
http://www5.cao.go.jp/keizai-shimon/kaigi/special/future/keizai-jinkou_data.html
- 中原純, 藤田綾子: 向老期世代の現在の生き方と高齢期に望む生き方の関係. 老年社会科学, 29 (1), 30-36 (2007).
- 難波淳子: 中年期の日本人女性の自己の発達に関する一考察; 語られたライフヒストリーの分析から. 社会心理学研究, 15 (3), 164-177 (2000).
- NIRA HP から PDF をダウンロード Dec. 26, 2016 アクセス
<http://www.nira.or.jp/pdf/0901areport.pdf>
- 西田友子, 舟橋博子, 榎原久孝: 中年期における特定健康診査の受診行動と関連する要因の検討. 厚生指標, 61 (8), 14-20 (2014).
- 小田利勝: 高齢者の老年観の測定尺度と分析モデル. 徳島大学社会科学研究紀要, 5, 159-180 (1992).
- 小田利勝: いまの高齢者は老後の準備を何歳頃に始めたか. 神戸大学発達科学部研究紀要, 11 (1): 161-172 (2003).
- 小田利勝: サクセスフル・エイジングの研究. 初版, 学文社 (2004).
- 岡本祐子: 中年期の自我同一性に関する研究. 教育心理学研究, 33 (4), 295-306 (1985).
- Rosenberg M.: Society and the adolescent self-image. Princeton University Press, New Jersey (1965).
- 嵯峨座晴夫: エイジングの人間科学, 初版, 学文社, 東京 (1993).
- 桜井茂男: ローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版の検討. 発達臨床心理学研究, 12, 65-71 (2000).
- Strawbridge W. J., Wallhagen M. I., Cohen R. D.: Successful Aging and Well-Being; Self-Rated Compared With Rowe and Kahn. The Gerontologist, 42 (6), 727-733 (2002).
- 菅知絵美, 唐澤真弓: 幸福感と健康の文化的規定因; 中高年のコントロール感と関係性からの検討. 東京女子大学紀要論集, 59 (1), 195-220, (2008).
- 杉澤秀博: 東京都における中年期および老年期の自殺死亡率の地域差, 社会老年学, 30, 37-46 (1989).
- 杉澤秀博: ミドル期の危機と発達; 人生の最終章までのウェルビーイング, お茶の水女子大学 21 世紀 COE プログラム誕生から死までの人間科学第 5 巻, 初版, 金子書房, 東京 (2008).
- 杉澤秀博: サクセスフル・エイジングとは何か; 高齢期の生き方のモデル. TASC MONTHLY, 476, 12-17 (2015).
- 鈴木征男, 小宮信夫, 西浦康一郎ほか: ライフデザイン【人生設計】の現状とその意識

(1997年調査)下. LDI REPORT, 12, 5-38(1997).

- Troutman-Jordan M., Staples J.: Successful Aging From the Viewpoint of Older Adults. *Research and Theory for Nursing Practice, An International Journal*, 28(1), 87-108(2014).
- 若本純子: 中年期の老いの自覚と対処における「関心」向け方による相違. *教育心理学研究*, 58, 151-162(2010).
- Wang Y. T., Lin W. I.: Successful ageing; The case of Taiwan, *Australasian on Ageing*. 31(3), 141-146(2012).
- 安田三郎・原純輔: *社会調査ハンドブック*. 第3版, 株式会社有斐閣, 東京(1987).